



犬・笑・暮だより vol.33

愛犬の命を守るためにできること II



今回もワクチンについての続きです。

●ワクチンの知識②

犬のワクチン注射とは、微量の病原体を体内に送り込むためにします。その病原体と戦うために体の中で抗体が出来上がり、次に万が一同じ病原体が体の中に入って来たとしても、その抗体がそれをやっつけてくれる……という、人間のワクチン接種と同じ仕組みになっています。

けれども、微量とはいえ、体の中に病原体を入れるわけですから、注意しなければならないこともいくつかあります。まず体調が悪い時には接種しないことです。体調が悪く、体力が低下している時には、普通なら感染せずに済む微量な病原体に逆に感染してしまったり、感染はしないまでも、吐き気や下痢などの激しい副作用が起きてしまったりする可能性があります。

発情中やその前後のメス犬、妊娠中、授乳中の場合も避けてください。旅行や引越しなどの環境が変わる前後の接種も、わんちゃんの精神的ストレスがある時期ですので、やはり控えた方が無難です。

ワクチン接種は体調が万全の時に受けましょう。シニア犬の場合や、現在治療中の疾患がある場合は、よく獣医さんと相談して下さい。

また、人間同様、抗体は接種後すぐに作られるわけではなく、約2～3週間かかります。その間も、激しい運動で体に負担をかけるのは厳禁です。運動や散歩はいつもより控え目にします。

もちろんシャンプーも、ワクチン接種予定日の2、3日前には済ませ、接種後しばらくは控えましょうね。



Mini Column

文豪の名前のない猫 VS英雄の名前をつけた犬

夏目漱石といえば猫を連想しがちですが、犬も飼っていました。夏目家の猫は、『吾輩は猫である』の主人公と同じように、代々、名前はないまま。それに対し、犬(雑種)には「ヘクトー」という立派な名前をつけ、たいそうかわいがっていたようです。

ヘクトーとは、ホメロス作といわれるギリシアの叙事詩『イリアス』の英雄 Hectorからつけられたそうです。そのヘクトーが病気にかかり入院していたことがあります。その病気というのがジステンパー。ジステンパーは、致死率が高い病気で、後遺症が残ることも多い怖い病気ですが、現在、ワクチンの普及によって感染する犬は昔に比べて激減しています。ヘクトーのジステンパーは、幸いにも回復しました。しかし、ヘクトーは3歳か4歳の若さで亡くなってしまいました。その数ヶ月後に書かれた『硝子戸の中』で、漱石はヘクトーについて愛情に満ちた話を残しています。また、漱石は庭の一角にヘクトーのお墓もつくっています。『吾輩は猫である』のモデルになった猫のお墓の近く、書斎からよく見える場所につくりました。



愛犬に関するお住まい・お庭のお悩みは **庭遊館** にお気軽にご相談下さい



携帯サイトはコチラ!!

庭園工事・外構工事・管理・設計施工

株式会社 庭遊館

〒504-0945 各務原市那加日新町6-65

TEL 058-216-3110

FAX 058-216-3113

<http://www.teiyukan.jp>

